

JICA  
青年海外協力隊経験者

岩倉博文市長

# ふれあいミーティング

～海外での経験と、帰国後苫小牧に住んでいて思うこと～

日時：平成24年11月15日（木）

午後6時～午後7時15分

会場：市庁舎5階 市長室

参加者（派遣国・分野・期間）

うつみ ともひろ  
内海 智博さん（ケニア・養護 H22.11～H24.9）  
きたじょ こういち  
北所 康一さん（中国・日本語教師 H21.6～H23.3）  
こばやし みゆき  
小林 美幸さん（トンガ・幼児教育 H22.9～H24.9）  
なかやま みなこ  
中山美奈子さん（ネパール・食品加工 H17.4～H19.4）



ふれあいミーティングとは、各種団体や市民各層と市長が懇談し、団体の活動内容等を知ることで、市政の参考とするものです。9月に青年海外協力隊員として派遣されていた苫小牧市在住の2名が帰国したことをきっかけに、今回の懇談が実現しました。

なかなか普段知ることができない協力隊員の活動や、帰国後の感想などを、子ども達など多くの市民の皆さんにお知らせしたいため、今回は懇談内容をまとめて公表することにしました。

## テーマ1 協力隊で活動しようと思ったきっかけ

**市長：**皆さんが青年海外協力隊で活動しようと思ったきっかけや、派遣国を選んだきっかけなどを聞かせてください。

**北所：**私は中国語教員の免許を持っていることや、妻が中国人ということもあり、中国に行きたいと考えていました。可能性を考えた時に、協力隊員で参加できたらいいなという順番でした。

**中山：**大学生の時に協力隊経験談を聞いたのと、インド旅行で衝撃を受けたこともあり、手に職をつけたら仕事を辞めて行きたいなという憧れがありました。私の専門職種でボリビアかネパールで要請があり、文化など日本となじみがあるアジアが好きで、ネパールを選びました。

**内海：**学校で働いていましたが、道を外れてみたいと思い、たまたま地下鉄で広告を見て応募しました。国の希望も特に無く、合格通知を見てケニアの場所を地図で探した感じです。

**小林：**海外に住んでみたいという思いがあったのと、職場の同僚がベトナムに幼児教育隊員として派遣されていて、遊びに行ったら活動を見たり、他の隊員とのふれあいを見ていいなと思い応募しました。トンガを選んだのは、言葉ができないので英語圏がいいと思ったからです。

## テーマ2 派遣国の印象など

**市長：**最初に派遣される時に事前に色々調べたとはいいますが、現地に行ったときの印象や、生活で苦労した点や感動した場面などを教えてください。

**内海：**色々な仕事をやってやろう！と意気込んでケニアに行きましたが、子ども達がすごく伸び伸びとしており、このままでいいなと思いました。日本とは違い、向こうでは授業をしなくても生活の中に学びがあり、大きい子は小さ



TOMOHIRO UTSUMI



い子の面倒を当たり前に見ていたり、洗濯できる子は洗濯、一日中タンクを眺めている子は、水がなくなれば黙々と水を運ぶなど、助け合いながら生活の力を学んでいることに感銘を受けました。日本でやるにはどうしたらいいかずっと考えていますが、明確な答えは見つかりません。

**北所：**中国に対してはある程度のイメージは持っていました。実際に行ってみて、格差がどんどん広がっていると感じたことや、物価がどんどん上がる様子に中国経済の加速を見る事ができました。

いくつかの学校に日替わりで行ったので、求められていることも違い活動内容を決めるのに苦労しました。感動したことは、大連で毎年大きなスピーチコンテストがあり、ペアを組んで参加した高校生が準優勝、もう一つの大会で優勝したことです。協力隊員としても誇らしく、何よりその子が喜んでくれ、その後日本語教師になったことが私にとって大きな収穫でした。

**中山：**ネパールの印象は、やはり山。飛行機から見えたエベレストに「おおっ」と思いました。活動していて感じたのは、周りの人がすぐに助けてくれること。雨季は道がぬかるんで、転ぶと助けてくれたり、「大丈夫か」と声をかけてくれたりします。日本との違いを感じました。

ただ、治安が悪く、一揆ではありませんが皆で首都に乗り込むようなことがあり、外出禁止令が出ていたり、思うように活動できない時もありました。

**小林：**行く前の印象は、地図を見ても「トンガ」とい



MIYUKI KOBAYASHI

う名前しかないの、どんな所かと思っていたら、首都の島は意外と発展していました。

私の派遣先は離島で、野菜もほとんどなく炭水化物ばかり食べていて 15kg も太ってしまいました。トイ

しゃワーも外でしたがすぐに慣れました。不便と言えば不便でしたが、日本は色々便利すぎて、無かったら無いで生きていけると思いました。



### テーマ3 青年海外協力隊の存在について

**市長：**それぞれの国で、青年海外協力隊の認知度はどうでしたか。現地の人は活動に対しどう感じているのか察知した場面などあれば聞かせてください。

**小林：**前任者がいたので、受け入れ先は大変良くしてくれました。幼稚園で働きましたが、私がいるからといって一所懸命働くわけでもなく、普段どおり変わらない姿もすごくいいなと思いました。トンガは近くにニュージーランドやオーストラリアもあり、よく交換留学生やボランティアが来ているので、外国人には慣れている様子でした。

**中山：**ネパールも、JICAの専門家がプロジェクトとして入っていて、その後協力隊がフォローアップで引き継ぐという段階の派遣でした。専門家は年配の方が多かったので、協力隊は若くて最初は学生のように扱われましたが、一緒にフィールドを歩いたり、たまたまカウンターパート\*1が勉強熱心だったので、学びあ

い楽しい日々を過ごせました。

**北所：**大連はそもそも日本の方が多く、日本人が来ても珍しいという地区ではありませんでした。ただ、小中学生にとっては初めて日本人と話すという場面を多く作れましたし、5~600人くらいの生徒と授業を一緒にしてきたので、日本人ってこういうものかというものをイメージとして与える事ができたものが、私が残せた現地の人への印象としては大きかったと思います。向こうの学生は朝5時頃から本を持って校庭を



KOICHI KITAJO

\*1 現地の人で、一緒に働き最終的に技術・役割を引き継ぐ人





歩いていたりして、中国は学生本人も家庭も、勉強することの大切さを強く思っていると感じました。

**内海：**ケニアは首都なら外国人も多いですが、私は田舎に行ったので外国人慣れしておらず、すぐに有名人になり大事にされていました。田舎の人だと自分の国の外の情報が少ないので、日本がどういう国なのかあまり知られていませんでしたが、車がトヨタが多かったので、現地の方は「日本＝トヨタ」という印象を持っているのではと感じました。アジア人は皆一緒に見えるようで、日本人と中国人が会話できないことに驚いたり、私を現地の方が紹介するときに「このトモヒロという奴は、中国から来た日本人なんだ」と紹介されたりもしました。周りにも協力隊員がいて、ある程度認知はされていましたが、協力隊というよりは、「俺の街に外国人が来た！」という感じでした。



#### テーマ4 帰国してからの苦小牧の印象

**市長：**皆さん帰国して苦小牧にいますが、約2年間外から見て、苦小牧をどのように感じましたか。印象に何か違いはありましたか。

**中山：**活動期間中に、紙フェスティバルで作られた紙の楽器を、市役所有志の方々に私の学校に寄贈していただき、苦小牧は紙が有名なところだと宣伝し、北海道は自然が豊かだという話をしました。ただあまりにもネパールの自然が雄大で、スケールが大きくて世界



MINAKO NAKAYAMA

は広がったなと思いました。ネパールに行ってからすごく山が好きになり、登山を始めました。向こうでは5,400mの山にも登りました。ネパールでは

山岳地帯で赤ちゃんも普通に生活しているの、日本の登山の方が辛いと感じました。苦小牧の樽前山はいいなと思っています。錦大沼もホテルが見られるし、ウトナイ湖も渡り鳥がきれいだし、ぜひネパールの人にも見せたいし、行かなかったら気がつかないと思います。

**北所：**苦小牧は水がおいしいです。蛇口をひねればそのままおいしい水が飲めるというのはすごくいいことだと、中国で暮らして思いました。中国では全て買った水を飲みます。学校でも生徒用に買った水のボトルが置いてあり、自由に水道の水は飲めません。帰国して思うことは、苦小牧市は大連とのつながりもあれば、友好都市の秦皇島とのつながりもあって、港を通じて中国とつながっていくのが楽しみです。

**小林：**苦小牧に住んでいたときは、四季を感じる事ができました。それでも子どもの頃よりは緑が少なくなったかと思っていました。トンガに行って、隣の島に自転車で巡回に行く時、すごく苦小牧の道に似ている道があり、「苦小牧ロード」と名付けて通るたびに苦小牧のことを思い出していました。まだ苦小牧にも緑があったんだなと、その時に思いました。帰国して感じたのは、苦小牧に限った話ではありませんが、日曜日にもお店が開いているし、飛行機も飛んでいるし、遅くまで残業するし、皆働くなあと思いました。



TONGAN BAG

**内海：**私は強盗にあって一度帰国しています。その時は生き延びた感があったせい、苦小牧の全てが美しく見えました。雪も降っていてきれいだったし、帰ってきてすぐ市役所で手続きをしましたが、何の待ち時間も無く書類が出てきて、日本人ってすごいなと思いました。ケニアで書類の手続きをしても、1枚出すのに1週間かかる世界なので、そういうところにも感動しました。あとは道路ですね。渋滞も無く、広く整備されていてとてもスムーズです。ショッピングセンターに行くところの上を歩いていいのかと思うほどきれいで、店員さんに「何かお探しですか？」と話しかけられて、びっくりして逃げてしまいました。



市長：よくまたその後ケニアに戻りましたね。

内海：突然だったので、悔しい気持ちがありました。ちょうど2か月苦小牧にいましたが、その2か月は特別な苦小牧生活という感じでした。任期を終えて今回帰国した時は、特別な印象はなく、2年前の苦小牧と同じに見えました。

市長：皆さんが言っていることを、ぜひ市民の皆さんに伝えてほしいと思います。ここしか知らない人は、「苦小牧は不便だ」「市役所も不便だ」、道路についてもたくさんの苦情があります。一度外に出て生活すると、こんなにきれいで便利な国はないと思います。それをどうやって知ってもらえばいいのか、いつも考えています。恵まれているということ、一人でも多くの人に知ってほしいです。



HIROFUMI IWAKURA

#### テーマ5 経験を次世代に伝えること

市長：それでは最後になりますが、皆さんが隊員として経験してきたことを、次の世代の子ども達に伝えてほしいと思っています。学校の先生をされている方もいらっしゃいますので、意識して取り組んでいること、伝えたいことなどあれば聞かせてください。

北所：国語教員として働いていて、今日も漢文の授業をしてきましたので、必要な範囲では中国のことや、生活、考え方の違いを不自然にならない程度に授業に盛り込んで、子どもの興味関心を引くという意味ではすごく効果的で、行って良かったと思っています。もう一つは、ゆくゆくは中国語を教えるような機会があれば、そういった所でも伝えていきたいと思っています。

内海：ケニアの「生活の中に学びがある」というのは、話すとき難しいですが、わかりやすいのが「ケニアで骨折をすると大怪我だ」という例です。向こうでは骨折をするとそのままくっつけてしまうので、私のクラスの生徒でも指が45度曲がっている子がいたり、骨折するとすごく膨れて、皮がはがれて化膿してというのが普通の症状です。日本だとそうなる前に治療するので、そのような違いがあるという話がわかりやすいかと思っています。日本で生活しているありがたみなどが、

子どもでもすぐに理解できるかと思います。

小林：子ども達に伝えたいことは、「家族を大切にしてほしい」ということです。トンガでは、小さい子どもからおじいちゃん、おばあちゃん、親戚の人が皆と一緒に住んでいます。年上の人を大事にしていて、そういうのがすごく素敵だなと思いました。親は絶対に守ってくれる存在で、大切にしてほしいなと思います。そして、物を大切にしてほしい。人は必要最低限で暮らせるので、一つ一つの物を大切にしてほしいです。あとは、先進国に住んでいるので、途上国の子達よりもチャンスがたくさんあります。そのチャンスを生かしてほしいし、やりたいと思ったことはやってほしい。市長もおっしゃっていましたが、苦小牧だけではなく、世界を見てほしいです。自分の周りの人以外にも、たくさんの方がいるということを知ってほしいです。

中山：やりたいと思ったことはぜひ行動すべきだと子どもには伝えたいです。外国に行きやすいのが今の日本だと思いますし、行動できるような教育をしていると思います。チャンスを実行力に使ってほしいです。

市長：ありがとうございました。色々なお話を聞かせていただきました。皆さんの経験をぜひ多くの人に伝えてほしいなと思うのと、皆さんのチャレンジした生き方みたいなものを一人でも多くの人に伝えてほしいと思います。そして、これからもぜひ苦小牧を離れることなく、苦小牧のために知恵やエネルギーを投資してほしいと思いますので、これからもよろしくお願いいたします。今日は本当にありがとうございました。



平成24年11月発行

苦小牧市総合政策部政策推進室市民自治推進課

Tel 0144-32-6152 (広聴担当直通)

<http://www.city.tomakomai.hokkaido.jp/siminjiti/>

